

# 「コピー」される日本

アジアの海賊版から

<5>

山田 奨治

日本製コンテンツの海賊版が、アジアから完全に消えることはないだろう。どれほど規制を加えても、手を変え品を変えて、新しの流通経路ができてあがつてしまつ。露店のDVD販売が難しくなれば、インターネットを使った販売へとかわる。規制することとそれを破ることは、まさに「いたちごっこ」なのだ。

## 功 罪

海賊版の流通を国際的に規制しようという施策が動いている裏で、海賊版を利用した「ビジネスモデル」ができてきていることもまた、指摘しておかなければなら

ない。  
たとえば、日本のポピュラー音楽の海賊版やカバー曲がアジア諸国に出回りはじめたころ、日本の音楽業界はその動きをほとんど無視していた。それらを放任しておかきで、アジアには日本のポピュラー音楽の巨大市場ができあがつた。そうやって市場ができあがつてしまえば、あとは海賊版の違法さと不徳徳を叫んで、その市場を自分のものにしてしまえばいい。ゼロから商品売り込むリスクも苦勞もなしに、楽にマーケットを獲得できる。



海賊版の取り締まりは「いたちごっこ」。ネット上でも堂々と販売されている

海賊版で作られた海外市場を手に入れるのに、ある

## 「違法」が育てた国際競争力

海賊版業者そのものと提携し、正規のライセンスを与えることだ。

権利者側からみれば、海賊版業者は現地の市場を知り尽くしている。あつという間にコピーを作る技術力と販売網ももっている。それを利用しない手はない。そこで、海賊版を非難する一方で、彼らと提携を進める。

海賊版業者のほうでも、いつまでも日陰の商売をするのではなく、現地市場での「実績」をPRして正規の代理店になりたいと思っている。日本側からライセンスさえ得られれば、今度は海外向けのショーである。事情はアメリカでも似ている。現地のファンによる無断コピー、無断上映など、あまたの著作権侵害がなくは、アメリカで今の日本アニメ人気はありえなかつた。

アニメの表現に精通したファンが無断でつける翻訳字幕を「ファンサブ」という。好きな連中がやっているだけに、翻訳の精度が高い。日本側も、「ファンサブ」の経験者に字幕製作を依頼するようになった。違法といえる行為の蓄積が、結果として権利者側にとってありがたいものになつている一例だ。

日本製コンテンツは国際市場でしゅうぶん強い。その強さは、海賊版という流通インフラで作られたと言いつつよい。皮肉なことに、最近はやりの知財保護論は、そのインフラを根底から破壊している。

国際的な海賊版をめぐる問題は、善悪の二分法には収まりきらない。その背後で動いている複雑怪奇な力学への目配せを忘れてはならない。

(国際日本文化研究センター 助教 山田 奨治)

常とう手段が使われていて、それは日本の権利者が同業のライバルをつぶしに